

理學博士 牧野富太郎 創始 主幹 藥學博士 朝比奈泰彥

植物研究雑誌

THE JOURNAL OF JAPANESE BOTANY

第 26 卷 第 11 號 (通卷 第 286 號) 昭和 26 年 11 月發行

Vol. 26 No. 11 November 1951

中井猛之進* : 問題にされた學名の再検討

Takenoshin NAKAI* : Miscellaneous notes on scientific
names of Japanese plants.

1) シキミの學名 牧野富太郎博士は昭和 18 年に植物研究雑誌第 19 卷 1 月號に
久々で筆を執つて一稿を寄せられ大に吾人同好者の意を強ふせられた。其中にシキミの
學名は *Illicium religiosum* Siebold & Zuccarini でなければならぬ, *Illicium anisatum*
L. は一部分がシキミを意味するがシキミの本名にはならぬと云ふ意見を發表された。
此は博士の以前からの持論であり御説は他にも發表されて居る。而して筆者も大正 12
年に渡外する迄は同意見であつて渡外して見たいと思って居た参考書が皆見られた後は
意見を變更せざるを得なくなつた。何故意見が變つたかについては昭和 8 年 12 月 30 日
朝鮮總督府林業試驗場發行の拙著朝鮮森林植物編第 20 輯第 113 頁に簡単に記して置
いたが兎角過され勝ち故に稍精細に記して同じ疑問を持たれる同學者の参考に資し
て置く。

Illicium anisatum L. (*Pimpinella Anisum* 様の *Illicium* の意) の最初の出版は
Species Plantarum 第 2 版第 664 頁 (1762 年版) ではなくて Systema Naturae
第 10 版第 2 卷第 1050 頁 (1759 年版と 1760 年版とある) である, 而して其時には
Kaempfer の書中にある圖のみで書いたシキミ一色であり *Illicium verum* Hooker fil. 即ち藥用の
Anisum stellatum は入つて居ない。即ち屬としては *Dodecandra* *Octogynia* (16 雄蕊 8 雌蕊) 群の下に

ILLICIVM. *Cal. 4-phyllus, deciduus. Petala 8. Nectaria 8 petaloidea, subulata.*

Stam. 16: antheris bifidis. Caps. ouatae, compressae, monospermae.

(譯文) シキミ屬, 莖片 4 個凋落す, 花瓣 8 個, 蜜腺 8 個花瓣様, 廣針形, 雄蕊 16
個蕊は 2 叉す, 莖は卵形側扁 1 種子あり。

* 國立科學博物館, National Science Museum, Tokyo.

とあり種としては

anisatum A. ILLICIVM. Skimmi. Kaempf. amoen. 881

(譯文) 小學名 *Illicium anisatum*. Kaempfer 氏著 *Amoenitatum Exoticarum* 第881圖のスキムミ (A は種の番號) とあるだけである。

1771年版の L 氏著 *Mantissa Plantarum* (植物補遺) 其二の第 395 頁には

Illicium anisatum ex Kaempfero tantum notam

(譯文) *Illicium anisatum*, 唯 Kaempfer 氏によりて記されしもの。

といふ極簡単な記事があり支那產種には觸れて居ない。又 L. 氏の *Systema Naturae* 第12, 第13兩版の第 335 頁には單に學名 *Illicium anisatum* が擧げてあるだけであり屬の記載其儘が種の記載となつて產地は記して無い。其故 1762年版の *Species Plantarum* 第2版第1卷第 664 頁に

anisatum 1. *Illicium*

Somo vulgo Skimmi. Kaempf. amoen. 880 t. 881

Habitat in Japonia, China ち

Planta a me non visa, fide Kaempferi recepta, forte Anisum stellatum officinarum, quod adjectum Tetraodonti ocellari ejus augit venenum

(譯文) *Illicium anisatum*. Kaempfer 著 *Amoenitatum Exoticarum* の第 880 頁第 881 圖にある鼠荳俗にスキムミ, 日本と支那とに生じ木本, 此植物は予によりて見られず, Kaempfer 氏を信じて承認す, 多分河豚を加ふれば其毒性を増す *Anisum stellatum* であらう。

としてあつても Kaempfer 氏の 881-883 頁に亘る長き記文の中には支那, 日本にては共に神に捧ぐる事皮を香にすることを書いて居ても薬用の *Anisum stellatum* 大茴香には觸れて居ないから *Illicium anisatum* は日本のスキミを意味し支那の大茴香の事ではない。J. D. Hooker 氏も 1888 年 7 月 1 日 *Anisum stellatum* (果實と種子とより成る薬用乾材の名であつて植物の種名ではない) を結實する樹に *Illicium verum* と命名して Curtis 氏の *Botanical Magazine* 第 94 卷第 7005 圖に圖解したときに異名に

Syn. I. *anisatum* Gaertn. Carp. vol. i p. 338 t. 69 (non L.)

(譯文) 異名. Gaertner 氏著 *Carpologia* 第 1 卷第 338 頁第 69 圖にある *Illicium anisatum* にして L. 氏の *Illicium anisatum* に非ず

と記して居る。但し Gaertner 氏の *Carpologia* (果實學) といふ本は *De Fructibus et Seminibus Plantarum* (植物の果實と種子に就て) といふのが本當の名で *Carpologia* は通稱である。其第 1 卷第 338-339 頁に *Illicium anisatum* の果實と種子の記事があり第 69 圖中第 6 小圖の左側に *Illicium anisatum* の果實と種子との圖解があり向つて右に *Illicium floridanum* の果實と種子との圖がある。而して *Illicium anisatum*

の圖さへシキミの果實と種子を畫いたものらしいから *non L.* とすべきかどうか疑はしい。Hooker 氏の記事に先だつ 8 年即ち 1880 年に Robert Bentley, Henry Trimen 共著の *Medicinal Plants* 第 1 卷が出版され其 10 頁には日本のシキミを *Illicium anisatum* L. とし異名に *Illicium religiosum* S. & Z. を擧げて着色圖解している。

上記の様に *Illicium anisatum* L. は *Species Plantarum* 第 2 版に於いてのみ大茴香 *Anisum stellatum* が入つて不純となつたけれども本來は Kaempfer 氏の圖解した圖に基いて記載した純粹の日本のシキミを意味している *Book Species* 書籍種である。L. 氏はシキミ以外にも日本植物 *Laurus camphora* (*Cinnamomum camphora* クスノキ), *Thea sinensis* (チヤノキ), *Uvularia japonica* (*Kadsura japonica* サネカヅラ), *Bignonia Catalpa* (*Catalpa ovata* キササギ), *Camellia japonica* (ツバキ), *Epidendrum moniliforme* (*Dendrobium moniliforme* セキコク), *Morus papyrifera* (*Broussonetia papyrifera* カヂノキ), *Smilax China* (サルトリイバラ), *Taxus nucifera* (*Torreya nucifera* カヤノキ), *Ficus pumila* (オホイタビ) 等の諸種を Kaempfer 氏の圖に基いて記載しているが此等も皆書籍種である。筆者は昭和 8 年 (1933) に朝鮮森林植物編第 20 輯中にシキミを書いた時には以上の考證に基いて *Illicium anisatum* L. をシキミの本名とし大正 11 (1922) 年 植物學雜誌第 36 卷第 120 頁に全羅南道珍島女貴山で採集したシキミを記した時に用いた *I. religiosum* S. & Z. を異名にしたのである。而して同時に支那種の學名に用いた *Illicium Linnaei* Nakai は潰滅したのである。

要するに日本に文献の蒐集が足らなくて牧野博士も私も *Systema Naturae* 第 10 版を見得なかつたことから起つた小問題である。*Systema Naturae* 第 10 版は兎角植物學者から忘られ勝ちである。筆者が植物研究雜誌第 17 卷 第 5 號の第 310-316 頁にケマンサウの學名の事を書いたときにも A. P. de Candolle 氏が同書により早くに出た *Fumaria spectabilis* L. を見落して居た事を注意して置いたのも其一例である。筆者は之を歐洲で見てから何んとかして入手したいと念願し百方手を回した上漸く満洲事變前に一本を購ひ得た。

次に牧野博士の一寸の思ひ附きから藥名 *Anisatum stellatum* を探つて作られた *Illicium stellatum* Makino は其基になる名が植物の種名でなくて乾材藥料の名であるから萬國命名規則の何の項にも當らぬ不要名である。且つ L. 氏の *Species Plantarum* 第 1 版の出版年 1753 年以降に *Anisatum stellatum* (*Anisum*⁽¹⁾ とないことに注意) の名で藥用の大茴香を記載したのは J. C. D. Schreber 監修の L. 氏 *Materia medica* 第 2 版 第 510 頁 (1783 年) からのこと故殊更に學名としやうとしても古いと

(1) 古書即ち *Dioscorides*, *Plinius*, *Dodoneus*, *Bauhinus*, *Raius* 等の諸書にある *Anisum* は皆 *Pimpinella anisum* L. であり、シキミ屬に關係はない。

は謂へぬ。此を *Illicium anisatum* の異名に用いたのは Houttuyn 氏の *Naturlijke Historie* 第5卷 (1775年版) 第277-278頁に *Illicium anisatum* を記したときにあるだけである。

シキミには此外にも Siebold 氏が 1830 年に日本の有用植物を *Verhandelingen van het Bataviaasche Genootschap* 第12卷に出版したときに其中の第30頁に *Illicium japonicum* といふ名を用いたことがある。

Illicium japonicum Sieb. Sikimi, Japon Ramuli florentes idolorum coronant sedes Sijnnon: *Illicium anisatum* Th.

(譯文) 學名 *Illicium japonicum* Sieb. 日本名シキミ, 花枝は佛前を飾る, 異名 *Illicium anisatum* Thunberg

とある。Siebold 氏が日本のシキミを *Illicium anisatum* L. とは別物と考へたのは此頃からのこととて後に *Illicium japonicum* を棄てて *Illicium religiosum* を用ひたのである, 此によつても Siebold 氏が牧野博士又は筆者の渡外前同様に支那の大茴香を *Illicium anisatum* L. と考へ日本のシキミを別の新種と考へた事が想像される。Siebold 氏の藏書は文部省の科學博物館に植物に關する限り寄贈されているがもとより L. 氏の *Systema Naturae* 第10版はない。本の不足から洋の東西幾人かの學者が同様の誤を重ねることは有り勝ちの事であつて敢て咎め立てする問題ではないが間違ひには相違ない。

(2) *Osmunda biformis* Makino

牧野博士がゼンマイの學名に用いられた *Osmunda biformis* Makino (1927年) は *Osmunda regalis* L. f. *biformis* Bentham (1861年) を種に引上げての新組合せである。何故牧野博士が其んな名を作られたかといふとゼンマイに附けられた *Osmunda japonica* Thunberg (1784年版) よりもヤシヤゼンマイに附けられた *Osmunda japonica* Houttuyn (1783年版)の方が一年早いからである。然し *Osmunda japonica* Thunberg の附いたのは實は *Flora Japonica* p. 330 (1784年) が最初ではなくて *Nova Acta Regiae Societatis Scientiarum Upsaliensis* (王立ウプサラ科學協會新報) 第2卷 (1780年版) の第209頁即ち *Kaempfer's Illustratus I* の中に出て居るから Houttuyn 氏のものよりは3年早い。從つてゼンマイの學名は *Osmunda japonica* Thunberg でなくてはならぬ。勿論 *Osmunda japonica* Houttuyn は逆に *Osmunda lancea* Thunberg の異名になり *Osmunda biformis* Makino を作る必要は無かつたのである。詳しくは文献刊行會に出版させた Thunberg's *Miscellaneous Papers* 並に植物學雑誌 第41卷 第679-680頁の拙文並に植物研究雑誌 第17卷第692-703頁に出された田川基二氏の *Osmundaceae of Formosa* 中 694-695頁の *Osmunda japonica* の記事を參照ありたし。此れも日本に *Nova Acta Regiae Societatis Scientiarum Upsaliensis* が無かつたために *Flora Japonica* に出た *Osmunda japonica*

ica が最初の出版と思ふ様になつた文献不足の生んだ結果である。

(3) *Hemerocallis disticha* Donn ワスレグサ

筆者の爪哇在勤中から今日迄に牧野博士から實際園藝に一回、採集と飼育とに二回都合三回攻撃されて居る問題がある。其は本田正次博士の日本植物名彙に *Hemerocallis disticha* Donn の和名にノクワンザウが用いてあるのは私の罪であるかの様な攻撃であるが此は大變に迷惑至極の事である。本田博士の名彙編纂には松村先生の名彙と變つて博士から一度の相談も受けたことはない。私は大正 13 年 Boston 滞在中 Sweet の British Flower Garden に圖解された東亜關係の植物を見て居る中に *Hemerocallis disticha* 即ち野生一重の花の咲くヤブクワンザウが彩色圖で立派に圖解されてあるのを見て大に喜んだ。何故かといふに渡外前にノクワンザウ(花色は種々に變化する)の黄花品と一重のヤブクワンザウとは葉の幅さといひ花筒の長さといひ合一すべからざるものであり、八重のヤブクワンザウは此一重のヤブクワンザウの八重咲品であること恰も日本に野生する水仙に一重と八重があると同様であると知つて居たからである。而して此事を知つた時によく混同されて居る *Hemerocallis fulva* L. とはどんなに違ふのかと考へたが幸にも横濱植木會社が歐洲から *Hemerocallis fulva* の生品を輸入したのが私が小石川植物園の園藝主任をして居る頃であつたから私は其を 50 株程植物園に購つて貰ひ樟茶屋の前の廣場にある長方形の花壇に植えてよく其習性を觀察することが出来た。葉はヤブクワンサウと同幅又は稍狭く一層長くだらりとして居り花莖は長く高さは人丈又は其以上になり且つ 2-3 回分枝する(ヤブクワンザウは一回), 其枝は丸くて其末梢に始めてヤブクワンザウに似た花序が出る。其故ヤブクワンザウに *Hemerocallis fulva* を用いるのは不可なりとの結論を得て居たから British Flower Garden にある *Hemerocallis disticha* を見たときには一重のヤブクワンザウは是なる哉と思つたのであつた。故に取敢へず其事を植物學雑誌に書き送り大正 13 年第 38 卷録第 179 頁に出版されたのである。筆者の歸朝後竹中要氏が藤井教授指導の下に *Hemerocallis* 屬の染色體を研究し其結果は Cytologia に出て居るが其材料の鑑定は小生と牧野博士がしたのである。竹中氏は *Hemerocallis fulva* と *Hemerocallis disticha* と *Hemerocallis longituba* とは各異なる染色體を有し一重のヤブクワンザウ *H. disticha* と八重のヤブクワンザウ *H. disticha* v. *Kwanso* とは同一染色體である結果を得たので私は満足したのであつた。筆者が植雜第 46 卷 111-123 頁に出版された日本帝國產キスグ屬植物なる小論文を書いたのは米國の New York Botanical Garden に居る Stout 氏に刺激されての事である。即ち Stout 氏著 Day Lilies が發表されたのを見ると日本產で書いてないものもあり又私と意見の異なる點もあるので私は小石川植物園栽培の材料と久内清孝・原寛氏等の採集した生品と東大理學部植物學教室所蔵の標本とに基いて小編を取纏めたのであつた。和名は異名の欄内に記して一々其出所を明記して置いた。其中には *Hemerocallis disticha* の一重品には決してノクワンザウとは記してない。即ち其

名には本草圖譜第17卷第11枚目にあるワスレグサを用いた。何故かといふと本草圖譜の同項には上に八重の品即ちオニクワンザウ一名ヤブクワンザウ *Hemerocallis disticha* var. *Kwanso* が畫かれ下には一重品即ち *Hemerocallis disticha* が畫かれて居るからである。岩崎灌園は延喜式にあるワスレグサは是なりとの意で之にワスレグサを用い八重の方にはワスレグサ千瓣のものと斷つている。唯後者に漢名の密萱を用いたのは研究を要する件と思ふ。牧野博士は從來一度もワスレグサの一重品を書かれたことはない。まさか一重品を御存じなくて私がノクワンザウを八重のヤブクワンザウの一重品と思つて居ると考へて居られるのではあるまいが植雜第10卷第142頁にも *Hemerocallis fulva* var. *Kwanso* 和名ヤブクワンザウ。オニクワンザウ。ワスレグサと記されて居るだけである。*Hemerocallis longituba* Miquel も牧野博士は最初 Maximowicz 氏同様に *Hemerocallis fulva* var. *longituba* Max. を學名とされ植雜第4卷第173頁と第10卷第142頁と草木圖說改訂增補版第2卷第460頁とに此學名を用い殊に植雜第4卷(1896年版)に始めてノクワンザウ(新稱)なる名を用いられたのである。然し *Hemerocallis longituba* の和名は橋法國の繪本野山草(1755年版)にはクワンザウと出て居り本草圖譜第17卷12枚目にはクワンザウ(紅萱草の意)とあり牧野博士も植雜第10卷には之を用い尙ほミズスゲなる名を加へて居られるし草木圖說初版第6卷(1856年版)第16-17枚目に亘る圖にはベニクワンザウとされて居るから牧野博士の主張されるノクワンザウは古名クワンザウでよいのであり其中の最も紅い花を咲く(牧野博士は植雜10卷に forma とされた)個體にクワンザウ又はベニクワンザウを用いればよいのである。要するに本田博士の名彙に和名が間違つて居たからとて *Hemerocallis disticha* の正體を見届けた筆者には何の關係もないことを明かにして置く。但し本田博士の間違ひをしたことの原因には筆者も全然關係なしと言ひ切れぬことが一つある。夫は上高地植物調査報告書(文部省版)に日光キスゲを誤つて *Hemerocallis disticha* Donn として居り此を又中野治房博士が同じ報告書中で *Hemerocallis fulva* var. *longituba* Max. として居られる(但し中野氏の標本の鑑定は誰がしたかは知らぬ)。其れと1928年に佐々木舜一氏が臺灣のベニクワンザウに *Hemerocallis disticha* Donn を誤用し Stout 氏が Addisonia 第16卷第483圖にベニクワンザウを同じく *Hemerocallis disticha* Donn として居るなどが併せて本田君の誤の因になつたのであらうと想像する。

ワスレグサは忘草即ち忘憂草の意であるとくく、斯んな厄介な和名の問題こそはワスレグサなりミョウガなりを食つて忘れたらよい。

(4) *Pleioblastus* と *Nipponocalamus*

川竹(女竹)属 *Nipponocalamus* の地下莖は先へ先へと主軸が延び稈は其れから側生する。之に對してカンザンチク属 *Pleioblastus* では先づ延びた地下莖の先から主稈が頂生する。小泉博士は植物分類地理第12卷2號第118頁(1943年)に *Pleioblastus*

astus は始めは sympodial に出ても後には *Pleioblastus* も *Nipponocalamus* も皆 sympodial に枝を出すから兩者は同一だといふ意味のことを書かれたが筆者は賛成が出来ない。小泉氏のは主稈についての論ではなく枝の事である。竹類の稈の sympodial, monopodial は地下莖に對する主稈の事であり枝迄を混同しては意味をなさない。枝はスズ属 *Sasamorpha*, ササ属 *Sasa*, マダケ属 *Phyllostachys (Sinoarundinaria)*, タウチク属 *Sinobambusa* 等々皆 sympodial である。小泉博士のいふ數年経つて先が止まる云々は定まつた性質によるのではなくて生長條件の悪くなつたときに起る現象であり數年を待つ事は要らぬ。條件さへ悪ければ一年でも二年でも先は止まる。小泉氏が又同卷の 121 頁に *Nipponocalamus* の地下莖は何かに突當つて地上に出ても直に向地性を表はして下に向ふが *Pleioblastus* は先が地上に出んとする傾向があり自然の妙今更の如く感じらるるとはれて居るが其は *Nipponocalamus* の monopodial, *Pleioblastus* の sympodial 性を言葉を換へて説明したことになる。Ligula は種類により長短があつて區別點にはならぬと言はれるが *Pleioblastus* は常に著しく長く *Nipponocalamus* は著しく短かく其間割然たる區別がある。小泉氏の様に *Bambusa angustifolia* をカンザンチク群に入れるから混同されるので此竹は筆者が植物研究雑誌第 18 卷第 365 頁に記した通り *Nipponocalamus Simonii* 川竹の變種である。矢張り *Pleioblastus* は琉球, 支那系の竹で頂生稈と長小舌とを有し *Nipponocalamus* は純日本系の竹で側出稈と短小舌とを有し明瞭に區別がある。

(5) *Meliosma sinensis* と *Meliosma Oldhami* との差異

此 2 種を小泉博士は同一種だと言はれるが筆者は明瞭な別種だと信ずる。*Meliosma sinensis* は筆者が滯米中大正 13 年 4 月に *Journal of Arnold Arboretum* 第 5 卷 80-81 頁に故 E. H. Wilson 氏採集の支那湖北, 江西兩省産の標本 5 個と湖北の標本にして一は Henry 氏, 一は Silvestri 氏の採品に基いて書いた新種である。小泉博士が同一種と見た通り筆者が新種とした時に Rehder 氏が何處が異なるのかと反問し筆者の説明に従ひ検鏡して成程と賛成した程外見は *Meliosma Oldhami* に似て居るが葉の表面の毛は其れよりも短かく裏の面には毛がないけれども葉脈の分岐點には *Cornaceae* などに見る様な褐色の密毛がある。後者では裏面一面又は葉脈上に毛は多いが毛は白色又は淡褐色（古くなるか又は標本にすれば）であり葉脈の分岐點には前者にある様な性質の密毛は全然出ない。一體木本植物は殊に毛の性質は大なる系統上の意義を有するから毛を漠然と見ては眞の分類は出來ない。筆者は木本植物を検する際には必ず先づ葉の毛の性質, 葉に腺點の有無, 葉緣細胞の形態を検し然る後に他の部分の検査をする。これが手取早い特徴を握る骨子である。

Meliosma Oldhami も亦支那に産するが至つて稀であると見え F. N. Meyer (先年支那で採集中洪水に押流されて悲劇の最後を遂げた植物採集家) 氏の南京附近の採品は Arnold Arboretum にも東大植物學教室にも M. 氏から直接送附したのがある。然

し朝鮮は本場だけに多くあり東大にあるものは黃海道（長山串，白鶴島，大青島），忠南（鶴龍山），全南（智異山彙，麗水靈鷲山，木浦諺達山，珍島，莞島，青山島，外羅老島，突山島），慶南（鎮海，統營彌勒山，亘濟島），濟州島等で採つたものがあり大部分は筆者自身の採集品である。舊日本には大正 10 年に對馬で筆者が始めて發見採集し嚴原附近の山，洲藻白嶽の山麓の林中などにあつた。今は九州本土にも發見されて居るとの事であるが東京大には九州本土の採集品はない。

○ツルハコベとは何か（檜山庫三） Kôzô HIYAMA: What is *Stellaria diandra* Maxim.?

ツルハコベ (*Stellaria diandra* Maxim.) というものはこれまで獨立種とされたり或はまたサワハコベ (*S. diversiflora* Maxim.) の變種とされたりして來たが、近頃水島正美氏はそれがサワハコベと全く同じものだということを主張されている。花部の變異のみを問題とすれば氏の云わる通りであるが、私はこれを區別してサワハコベの變種となす説に左袒したい。てつとり早く云うとこの兩者は莖の毛の有無で區別ができる。サワハコベの莖には 1 條又は 2 條の毛線があるがツルハコベにはこれがない。水島氏はサワハコベの莖を全く無毛と記されたが、Maximowicz はサワハコベの莖には 1 本の毛線のあることを明記しているのであつて、私もこれを認めており又中には毛線の 2 本のものも見ている（武藏西多摩郡眞名井澤產）。そしてこの毛は秋に入つてもなお認めることができる。又 Maximowicz も既にサワハコベとツルハコベとは季節的な二つの型ではないかとの疑問を持つたようであるが、莖の毛線の有無以外にはまずさしたる區別點がなく、ツルハコベは春からツルハコベとして存在し、初めから莖は無毛である。Franchet & Savatier (Enum. Pl. Jap. 2: 296) が花の無い標本をサワハコベと同定した理由もここにあるのであろう。従つてツルハコベには *Stellaria diversiflora* Maxim. var. *diandra* (Maxim.) Maxim. ex Makino の名が生きてくるものと思う。花辦、雄蕊の數は水島氏の觀察された通り春秋で相違すること兩者共同じて莖の毛線の有無以外の點でこれを區別することはできない。

According to Mizushima's opinion (Journ. Jap. Bot. 26 (1): 1), *Stellaria diandra* Maximowicz is nothing but an autumnal form of *S. diversiflora* Maximowicz, but I believe that the former should rather be regarded as a variety of the latter because of the absence of the pubescent character on the stem. In the original description of *S. diversiflora* the author has already stated that its stem has a pubescent line on one side.